

親子調査データの信頼性

篠原清夫

Reliability of Parent- Child Survey Data

要旨：これまで数多くの親子調査が行われてきたが、親子ペア・データの質に関しては検討されてこなかった。本研究の第一の目的は、親子のデータを照らし合わせた結果、同一項目がどの程度一致するかを分析することで、親子データの信頼性を確認することである。また信頼性の高いペアのデータを取り出して分析した結果と、そうでないデータを含めて分析した結果に違いが発生するのかについて検討することが第二の目的である。

本研究のデータは、茨城県の小中学校を対象として実施された調査結果で、親子のデータを一致させることができたのは896ペアであった。親子ペア・データを用いて属性や生活状況など本来一致すべき同一の質問について一致度を調べたところ、回答が一致しないペアが1~2割存在した。一致すべき項目中、全ての項目で一致する完全一致ペアは全体の6割弱であった。データの信頼性が高い完全一致ペアと、やや信頼性に疑問が残る不一致ペアの回答を比較した結果、回答傾向に統計的有意差がみられた項目は1割程度存在した。しかし、完全に一致する信頼性の高いペアのみのデータと、信頼性に疑問が持たれる回答不一致ペアのデータを含めた全データでの分析を比較してみると、その回答傾向に違いがみられなかった。これらのことから親と子の回答が一致しなくとも、全く信頼性がないデータとは言えないことが示唆された。すなわち親子の回答が一致する信頼できるデータと、疑問の持たれるデータを一緒にして分析してもさほど問題はないことが本データからは明らかになった。

キーワード：親子調査、信頼性、不一致

1. 問題の所在

これまで親子を対象とする調査が教育現場、行政、シンクタンク、社会学研究者などによって数多く行われてきた。これらの調査では親子のデータを比較し、その意識の相違に関する分析や、親と子の関連性などの分析が行われているが、近年の親子を対象とした調査の例をいくつか紹介しながら、これら親子調査研究の課題について考察していく。

藤崎(2005 [2000年調査])は農学の立場から、岩手県盛岡市の認定農業者親子間の就農誘導と就農意欲に関する調査を郵送法で実施している。その結果、農業に対するイメージが親子で異なること、就農誘導についての意識では子は親ほど誘導を感じていないことなどを分析している。これらの分析から親子の農業に対する意識の相違はわかるが、親の就農希望により子の就農意識がどのように異なってくるのかなど、親子をペアにした分析はなされていない。

高橋(2007 [2002-2004年調査])は食物栄養学の立場から、岩手県内の中学生と母親の身体状況と食生活についての調査を行い、子と母親とでは料理・菓子類の嗜好に違いがあるが、親子間では主要栄養素の摂取傾向が類似していることを見出している。しかし、これは学校ごとの親子の関連の分析であり、個々の親子ペアを関連させての分析ではない。また、調査票の配布回収方法に関する情報が無いという問題がある。

東京都生活文化局(2003)は、東京都の5年生・中学2年生と父親・母親に、親子関係に関する調査を留置法

で行った。この調査の中では親と子の価値観の比較を行っており、努力の重要性は親の認識が高く、将来よりも今が楽しければよいと考えているのは子どものほうが多いなど、親子の価値観の相違について明らかにしている。親子の価値観がどれほどずれているのかを、親子データをペアにして分析すると興味深いと考えられるが、そのような分析は見当たらなかった。

全国PTA連合会とリクルート「キャリアガイダンス」(2003)は、全国の高校3年生と保護者に進路に関する意識調査を郵送法によって行っている。その結果、子と親の進路希望は、大学・短大進学希望の場合は約8割親子で一致するのに対し、専門学校の場合にはズレが大きく一致するのは約半数しかいないことが明らかになった。親子データをペアにして進路希望のズレのクロス集計は行われているが、それ以外親子ペアを一致させたデータ分析はなされていない。希望職業などの分析も行われているが、親子の単純集計結果を比較したのみである。また回収率(36.0%)がやや低いという課題も残る。

明治安田生活福祉研究所(2004)は、全国の高校生と保護者に、就職や結婚などの価値観に関する調査を郵送法によって行っている。子が仕事に求めるものは収入とする者が多く、親は生き甲斐や将来の安定とする者が多いなど、職業や結婚に対する価値観に違いがみられることがわかった。親子とも1,600名を超える多くの標本データを収集した貴重なデータであるが、親子をペアにした分析はなされていない。単純集計の比較だけでなく、親子ペアを一致させたデータを用いた就職・結婚・離婚

に関する分析があれば興味深い。

中村ら（2007 [2004年調査]）は社会心理学の立場から、日本とトルコの中学・高校の生徒と父母を対象とし、親子関係と青少年の非行的態度の調査を集合法で行っている。親に対する心理的距離の違いからグループに分け、日本・トルコ両国とも親との心理的距離が近い群において非行や犯罪に対する許容度が低いことを明らかにしている。回収率などの基本的な情報がなく、親子それぞれのデータからのみの分析にとどまっている。

お茶の水女子大学 JELS（耳塚ほか）（2005-2007 [2003-2004年調査]）は教育社会学の立場から、関東地方大都市近郊の中都市の小学校6年生と親を対象に、学力と家庭背景に関する調査を集合法（子）・郵送法（親）で実施している。その結果、小学生の学力は父親の学歴以上に、世帯所得や学校外教育支出などの経済変数と子に対する学歴期待のほうの影響が強いことが重回帰分析により明らかにされている。ここでは学力を従属変数、家庭背景を独立変数にした重回帰分析など7つの分析が親子を一致させたデータを用いてなされているが、一致したデータの正確な数は不明である。

犬山市教育委員会・荊谷ら（2006 [2005年調査]）は行政・教育社会学の立場から、愛知県犬山市の小学5年～中学3年と親を対象に集合法（子）と配票法（親）を用いた調査を実施している。父親の職業により子の算数理解度が異なっており、専門的・技術的職業、管理的職業、事務的職業では高く、技術工・労務関係、販売関係では低いことを明らかにしている。また重回帰分析結果からブルーカラーと下層ホワイトカラー出身の子どもが多いクラスの場合は教育格差を広げる影響を持っているが、子ども同士がお互いに教え合うような「学び合い」型の授業によって、教育格差が小さくなることを見出している。この調査は教育委員会と共同の研究なので回収数、回収率ともに高い貴重なデータを収集している。また積極的に親子ペアを一致させたデータ分析を行っているところに特徴がある。

宮城県塩釜市と宮城大学（2006 [2005年調査]）は、行政・保健の分野から、宮城県塩釜市の小学4年生、中学2年生と保護者を対象に親子の食生活実態調査を行っている。2001年調査と2005年調査を比較し、4年間で朝食を食べる親の割合はほとんど変化がなかったが、子が小学4年生から中学2年生になると朝食をとることが少なくなっている。親と子の朝食摂取状況の関連の分析を親子ペア・データで分析した結果があれば興味深いだが、そのような分析はなされていない。

第一生命経済研究所研究開発室（2007）は、モニターの小学4年～中学2年と父母を対象に、子どもの生活に関する調査を郵送法で行っている。母親に比べ父親は子の学校の様子を把握していないこと、母親が子どもの勉強を見る時間は平日の場合無職の母親のほうが多く、休日の場合は有職の母親のほうが多い傾向にあること、子の相談相手は主に母親であることなどが明らかにされている。「本調査の特徴は、同一世帯の父親、母親、子どもの3者に対して、それぞれアンケートを実施している点にある。3種類のアンケート結果を分析することにより、子どもが通う学校の教育内容に対する父、母、子の意見の相違を比較することや、同一世帯における父母の教育へのかかわりと子どもの勉強時間の関係をみるなどが可能になる」（p.37）と述べているが、報告書の中では父母のかかわりと子の勉強時間の関連性に関する分析はなされていない。

以上のように親子調査が実施される場合には、親子のデータを比較しながら、その相違に着目する研究などが行われている。しかし親子ペア調査の長所は、親子の比較ができるだけでなく、親と子のデータを併せペアにすることによって、単一のデータからでは明らかにできない家庭内における親子の意識のずれや、家庭背景・階層差の影響などを解明できることがあげられる。そのためには親子調査のデータを一致させて分析することは極めて重要な情報をもたらすことが多いが、これまでの調査例をみると、親子データを一致させペアにした分析は、一部を除き積極的に行われてきたとは言い難い状況にあるといえよう。

しかし、近年では親子ペアのデータを積極的に活用する研究も出てきている。前述した荊谷ら（2006）による父職別算数理解度平均値の比較、格差縮小の重回帰分析はそれにあたる。藤田（2008）も同じデータを用いて親子ペア調査からみた階層差の研究を行っており、親の勉強に関する意識の主成分分析結果を用いて、勉強を将来と結びつける「連結性」意識は階層が高いほど高くなること、親の階層が高くなるほど子どもの授業の理解度・進路希望年数が高くなること、保護者の勉強に関する解釈図式の違いが子どもの教育達成の違いをもたらしていることなどの分析をしている。また耳塚（2007）の学力と家庭背景の分析、海野・片瀬（2008）の高校生意識への家族の影響分析など、優れた調査研究が行われるようになった。ただし、このような親子ペア・データに関してはそのデータの質について論議されることは少ない。親の欠票からデータ分析の問題点を指摘している神林・

表1 近年の親子調査とペア分析の有無

団体・研究者（調査年）	対 象	主な調査内容	一致人数	回収率 上：子ども 下：親	親子ペア 分析
藤崎（2000）	M市小5以上 農家120人	就農意識	46（?）	全体38.3%	無
高橋（2002-2004）	中学生 人数不明	身体状況・ 食生活	183	平均79.4%	無
東京都生活文化局（2003）	小5・中2 2,000人	親子関係		36.0% 36.0%	無
全国高校PTA連合会・リクルート（2003）	全国高校生 2,000人	進路	316	24.8% 19.7%	あり（1）
お茶の水女子大 耳塚ほか（2003）	大都市近郊小6 1,202人	学力・家庭背景	298*	96.8% 29.5%	あり（7）
明治安田生活福祉研究所（2004）	全国高校生 3,000人	就職・結婚など	1,648	54.9% 54.9%	無
中村・松井・堀内・石井（2004）	中高生 1,515人	非行的態度			無
犬山市・苅谷ほか（2005）	犬山市小5～中3 2,590人（親）	理解度など	2,465	98.3% 95.2%	あり（4）
塩釜市（2005）	小4・中学生 1,292人	食生活		93.3% 54.0%	無
お茶の水女子大 耳塚ほか（2006）	大都市近郊中3 1,244人	学力・家庭背景	521*	93.5% 44.8%	あり（6）
第一生命経済研究所（2007）	モニター小4～中3 1,078人	生活全般		96.6% 86.2%	無

*親のみの回収数で、子どもと一致しないデータも含む

片瀬（2009）の研究があげられる程度である。

そこで本研究は、学校を通して調査データを収集した場合、親子のデータを照らし合わせた結果、同一項目がどの程度一致するのかを分析することで、親子データの信頼性を確認することを第1の目的とする。また信頼性の高いペアのデータと、そうでないデータを含めて分析した際に、違いが発生するのかどうかについて検討することが第2の目的となる。

2. 方法

本調査の対象は、茨城県内の小学5年、中学2年およびその保護者で、サンプリングは、茨城県内を県北、県央、鹿行、県南、県西の5地区に分け、その中からそれぞれ市街地と郊外の学校各1校を選び、小学校10校、中学校10校の計20校を抽出した。サンプルとなった学校の在籍児童生徒総数は1,974人（小学校768人・中学校1,206人）である。

調査方法は、事前に各学校に調査依頼した後、調査票

を郵送し、児童生徒に関しては集合法により調査を実施、親に関しては子どもに調査票を持ち帰ってもらい、記入後封筒に密封して学校ごとに回収、あるいは直接郵送で回収した。調査時期は2004年10月～2005年1月である。

親子のデータを一致させる方法については、まず各学校で子どもに親子の調査票が入った1つの封筒を配布し、子どもの調査票だけを取り出させその場で記入してもらい子どもの調査票だけを回収した。親の調査票が入っている封筒を家に持ち帰ってもらい、後日学校ごと、あるいは郵送で回収した。親子とも無記名の調査であったが、調査票の右隅にナンバーリングがしてあり、その番号によって子と親を一致させることができるようにした。ただし、番号は子と親は全く別であり、調査者側が回収後、調査票番号リストから親子の調査票を一致させ集計作業を行った。調査票の番号についてはお願ひ文の中で、「あなた個人を特定するためのものではなく、単なる整理用の番号です」という説明をつけた。

3. 結果

3.1 回収数と回収率

サンプルとなった学校の在籍児童生徒数1,974人中（小学校768人・中学校1,206人）、回収できた調査票は子どもが1,764（小学校741・中学校1023）、親が946（小学校339・中学校571）であった。在籍児童生徒数ベースの回収率は、子ども89.4%、親47.9%である。子どもは集合法で回収したため、欠席した児童生徒以外はほとんど回収できたが、親の調査票は子どもが家に持ち帰り、記入してもらった後学校で回収あるいは郵送してもらったため、回収率は低くなり47.9%にとどまった（表2）。学校別に回収率をみると、子ども調査票の回収率は小学校のほうが高く（96.5%）、中学校のほうが低い（84.8%）。これは児童生徒の出席率の関係だと考えられる。しかし、親の調査票の回収率は小学校（44.1%）よりも中学校（50.3%）のほうがやや高い。

回答者の属性は、児童生徒の性別については男子52.2%、女子47.8%であった。親の回答については父親・母親を指定しなかったが、その結果、回答した親の性別は男性11.4%、女性87.5%（NA1.2%）で母親のほうが多かった。年齢は、20歳代0.1%、30歳代31.0%、40歳代61.8%、50歳代5.7%、60歳代0.3%（NA1.1%）で、親の平均年齢は41.8歳（SD4.8）であった。

これらのうち親子ともに回収できた調査票、つまり親子のデータを一致させることができたのは896ペアで、在籍児童生徒数の44.0%にあたる。今回の調査結果では、実際に親子をペアにして分析できるデータは在籍児童生徒の半数以下になっている。しかしながら教育委員会などが関与した親子調査以外のこれまでの調査結果と比較すると、それほど親子データの回収率は低くなく、回収数も少なくはないといえる（表1参照）。

3.2 親子ペアの回答の一致率

親子を一致させることができた896ペアのデータを用

表2 回収率

		子ども	保護者	一致
小学	回収数	741	339	325
	(回収率)	96.5%	44.1%	42.3%
中学	回収数	1023	607	571
	(回収率)	84.8%	50.3%	47.3%
計	回収数	1764	946	896
	(回収率)	89.4%	47.9%	44.0%

いて、属性などの本来一致すべき同一の質問について、親子でどの程度一致するのか調べた。調査票表紙のお願い文には、「この調査票を持ち帰ったお子さんについてお教えください」と書き、調査項目の中でも網掛け強調をして調査票を持ち帰った子どもについて回答してもらうように注意を喚起した。

子と親の調査票それぞれに対象となる子の年齢を回答する項目がある。小学5年生の場合10歳か11歳、中学2年生の場合13歳か14歳のはずである。分析の結果、調査票を持ち帰った子の年齢に関して、親と子が一致しなかったペアは14.0%（124ペア）存在した（表3）。1割以上の親子が一致しないことになる。中には2歳違っているデータも4ペア存在した。子ども本人が年齢を間違える可能性は低く、一致しないのは親の回答に誤りがあるからだと考えられる。しかし1歳程度の勘違いはあるものと思われるため、1歳の誤差を認めることにした場合、不一致は0.5%（4ペア）となり、ほとんど一致する結果となった。

次に子の性別が親子で一致しないペアをみると8.5%（75ペア）存在した（表4）。親が子の年齢を1歳程度勘違いすることはありそうだが、性別を勘違いすることはまずない。すなわち性別が一致しないのは、選択肢を親子どちらかが間違えたか、きょうだいがいる場合、親が対象となる子どもを勘違いして答えている可能性がある。1歳前後の誤差を認めた場合、年齢はほぼ一致しているため、性別が一致しない理由として子ども同士が調査票を交換してしまったために、親子が一致しなくなってしまったというケースも考えられるだろう。このようなケースの場合、親子のデータを一致させても全く意味のないデータになってしまうことになる。

対象となる子ども部屋の状況について、「個室」「きょうだい一緒の部屋」「とくにない」について尋ねた質問

表3 子どもの年齢

		親回答						
		10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	計
本人回答	10歳	97	45	1				143
	11歳	28	153		1			182
	12歳			22	2	1		25
	13歳			2	197	29	1	229
	14歳				11	293	3	307
	15歳							
	計		125	198	25	211	323	4

不一致 124ペア 不一致率 14.0%

表4 子どもの性別

		親回答		
		男子	女子	計
本人回答	男子	401	41	442
	女子	34	410	444
	計	435	451	886

不一致 75ペア 不一致率 8.5%

表5 子ども部屋の状況

		親回答			
		なし	一緒	個室	計
本人回答	なし	54	32	13	99
	きょうだいと一緒に	44	196	29	269
	個室	33	58	421	512
	計	131	286	463	880

不一致 209ペア 不一致率 23.8%

で、親子で一致しないのは23.8% (209ペア) と多かった (表5)。これに関しては、「子ども部屋」について子と親がどのように認識しているかの違いが影響していることが想定される。家庭によっては、親が「個室」を与えていると思っていても、その部屋が多機能である場合は、子は子ども部屋「なし」と思っているかもしれない。このような認識のずれという理由から一致率が低いと考えられる。

対象となる子の朝食のとり方について、親子に「毎日食べる」「食べないときあり」「食べない」について質問した結果、不一致ペアは14.5% (129ペア) 存在した (表6)。子ども部屋ほどではないが、不一致率はやや高い。不一致の理由としては、認識のずれや事実誤認という要因や、親が朝食をきちんと食べさせているかどうかが問われる質問なので正直な回答をしていないという要因も考えられる。

これらの一致すべき質問項目の回答結果をみると、親子の回答が一致しないケースが1割~2割存在することが明らかになった。その理由は、対象となる子以外について回答したり誤ったりしているケースや、親子の認識の違いがあるケース、子ども同士が調査票を交換したケースなど様々考えられる。しかし今回の調査からその明確な要因は明らかにできない。ただし、これら親子で回答が一致しないデータは、ケースによっては信頼性に欠ける可能性があるデータだといえよう。

表6 朝食のとり方

		親回答			
		毎日食べる	食べないときあり	食べない	計
本人回答	毎日食べる	722	22	2	746
	食べないときあり	73	36	3	111
	ほとんど食べない	12	17	5	34
	計	807	74	10	891

不一致 129ペア 不一致率 14.5%

表7 親子回答一致数

	ペア数	%	累積%
完全一致	469	57.2%	57.2%
不一致1個	252	29.1%	86.3%
不一致2個	90	10.4%	96.7%
不一致3個	24	2.8%	99.4%
完全不一致	5	0.6%	100.0%
計	866	100.0%	

3.3 親子不一致回答と属性との関連

これまで見てきた年齢・性別・子ども部屋・朝食という4つの客観的事実の質問項目全てに親子とも回答してくれたのは896ペア中866ペアであった。その中で4項目全てが一致する完全一致ペアは57.2%であった。いずれか1つ一致しないペアは29.1%、2つ一致しないペアは10.4%、3つ一致しないペアは2.8%、全て一致しない完全不一致ペアは0.6%であった (表7)。一致しなければならぬ回答が親子で全て一致したのは6割弱にすぎず、異なっているのは4割強存在することになる。ただし、全て一致する完全一致ペアと1つだけ一致しないペアを累積すると86.3%になり多数を占める。

さて学校別に不一致度をみると、子の性別が親子で一致しなかったのは小学校16.7%、中学校3.7%で、 χ^2 検定の結果、小学校のほうが有意に多かった ($p < .01$)。年齢についても小学校23.1%、中学校8.7%で小学校の不一致率が高かった ($p < .01$)。さらに子ども部屋に関する質問でも小学校の不一致率が高く、小学校39.8%、中学校14.4%で統計的有意差がみられた ($p < .01$)。朝食に関する質問では小学校13.2%、中学校15.2%でやや中学校の不一致率が高かったが統計的有意差はなかった (n.s.)。一致すべき項目で、中学校よりも小学校の親子ペア・データの不一致率が高い傾向にあることがわかった。

日本の家庭では子どもは母親との接触が多いと言われるため、回答した親が父親であるか母親であるかによって不一致率に違いがあるかもしれない。そこで回答者が父親・母親別で不一致率をみた。その結果、年齢での不一致率は回答者が父親の場合17.9%、母親の場合13.2%でやや父親のほうが高かった。しかし χ^2 検定の結果、統計的有意差はみられなかった。性別の不一致率でも父親がやや高く、子ども部屋、子どもの朝食に関しても同様の結果であったが、いずれも有意差はなかった。一致すべき項目で父親の不一致率が若干高い結果が出たが、全ての項目で有意差はなかった。すなわち、男親であるから子どものことを良く知らず、親子回答の不一致率が高くなるという傾向は今回のデータではみられなかった(表8)。

ここで表7で示した4項目全てが一致したペアを「完全一致ペア」(全体の57.2%)と呼び、一つでも異なったペアを「不一致ペア」(同44.8%)と呼ぶことにする。この「完全一致ペア」「不一致ペア」2つのグループを属性別にみると、不一致ペアの割合は小学校57.1%、中学校34.4%で、小学校の親子で不一致ペアが有意に多かった($p < .01$) (表9)。

地域別にみると、市街地にある学区の不一致ペアは47.9%、郊外にある不一致ペアは38.7%で、市街地の親子の不一致ペアが多かった($p < .01$) (表10)。一般的な社会調査では都市部よりも農村部で回収率が高いことが知られているが、親子調査のばあい信頼できると考えられる完全一致ペアのデータが多いのは、市街地よりも農村部を含めた郊外の学校のデータであることがわかつ

た。これは後に分析する保守性とも関連があると考えられる。ちなみに市街地(42.0・SD4.9)と郊外(41.6・SD4.6)の親年齢の平均値には有意差は存在しない。

対象となる子の性別でみると、男子の場合、不一致ペアは47.1%、女子の場合38.7%で、子が男子の場合、不一致ペアが多かった($p < .05$)。明確な理由はわからないが、調査票を子ども同士が交換してしまうというケースを想定する場合、男子のほうがそのような行為をしてしまう可能性が高いと考えられる。

3.4 親子不一致回答と家庭背景

次に親子の回答の一致度と家庭背景との関連についてみていく。朝食のとり方を「完全一致ペア」と「不一致ペア」で比較すると、子ども本人の回答で「毎日食べる」とするのは「完全一致ペア」は93.7%であるのに対し、「不一致ペア」は70.1%で、 χ^2 検定の結果1%水準で有意差がみられた(表11)。つまり親子の回答が一致する子どものほうが、朝食をきちんと食べると回答する傾向があることがわかった。

また、親に「あなたは一般的に女性の職業についてどのようにお考えですか」という質問をした結果、「女性は職業を持たないほうがよい」と回答したのは完全一致ペア8.5%、不一致ペア0.8%で、完全一致ペアの方が多い(表12)。一方、「子どもができて、ずっと職業を続けるほうがよい」と回答したのは完全一致ペア24.9%、不一致ペア31.4%で、不一致ペアの方が多かった($p < .01$)。このことから「完全一致ペア」の親のほうが女性の社会進出に対して慎重な意識を持っていることがわ

表8 親の性別からみた親子不一致の割合

	人数	年齢	性別	子ども 部屋	朝食
父親	106	17.9%	13.3%	25.2%	15.9%
母親	772	13.2%	7.9%	23.6%	14.1%
計	878	13.8%	8.5%	23.8%	14.3%
有意差		ns	ns	ns	ns

表9 学校別にみた一致ペア

	完全一致ペア	不一致ペア	計
小学校	42.9%	57.1%	100.0%
中学校	65.6%	34.4%	100.0%
計	57.2%	42.8%	100.0%

$P < .01$

表10 地域別にみた一致ペア

	完全一致ペア	不一致ペア	計
市街地	52.1%	47.9%	100.0%
郊外	61.3%	38.7%	100.0%
計	57.2%	42.8%	100.0%

$P < .01$

表11 朝食のとり方別にみた一致ペア

	完全一致ペア	不一致ペア
本人回答		
毎日食べる	93.7%	70.1%
食べないときあり	5.7%	21.6%
ほとんど食べない	0.6%	8.4%
計	100.0%	100.0%

$P < .01$

表12 女性の社会進出意識別にみた一致ペア

	完全一致ペア	不一致ペア
女性は職業を持たないほうがよい	8.5%	0.8%
結婚するまでは、職業を持つほうが良い	3.4%	2.7%
子どもができるまでは職業をもつほうがよい	4.9%	3.8%
子どもができて、ずっと職業を続けるほうがよい	24.9%	31.4%
子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつほうがよい	47.7%	52.5%
その他	10.5%	8.7%
計	100.0%	100.0%

P<.01

表13 完全一致ペア・不一致ペアの回答傾向の相違

	設問数	有意差のある項目	%
親調査内容	61	10	14.6%
子ども調査内容	72	6	8.3%
計	133	16	12.0%

表14 完全一致データのみと全データを用いた分析結果の相違

	設問数	有意差のある項目	%
親調査内容	61	0	0.0%
子ども調査内容	72	0	0.0%
計	133	0	0.0%

かる。

これら子どもの朝食や親の女性の社会進出意識から判断すると、比較的保守的な家庭のほうが質問項目が完全一致する親子ペアが多い傾向にあるといえよう。

3.5 完全一致ペアと不一致ペアの回答傾向の相違

データの信頼性が高いと考えられる「完全一致ペア」と、やや信頼性に疑問が残る「不一致ペア」の回答を比較すると、親調査票の全61設問中10設問（16.4%）で完全一致ペアと不一致ペアの回答傾向に統計的な有意差がみられた。また子調査票では全72設問中6設問（8.3%）に有意差がみられた（表13）。「完全一致ペア」と「不一致ペア」には1割程度の設問に回答傾向の違いがみられるが、この相違は全データを生かして分析していく際に問題となるのであろうか。

ここで考えられるデータ分析に関する方法論的課題は次の点である。①完全一致する信頼性のあるデータのみを分析対象としたほうが良いのか（信頼のあるデータのみを使用）。②信頼性がないと考えられる不完全なデータも貴重な回答として生かして分析したほうが良いのか（収集した全てデータの活用）。この点について検証してみる。

3.6 全データと完全一致のみデータ分析の比較

信頼性があると考えられるデータのみで単純集計した結果と、信頼性に疑問が残るデータをも含めた全データ

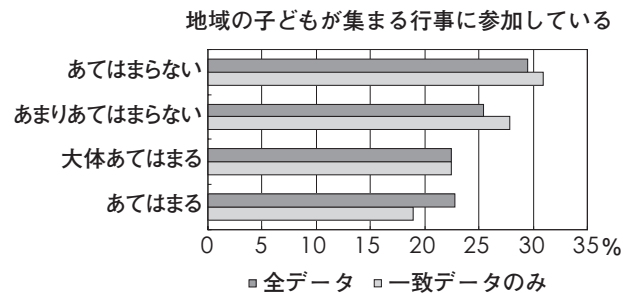


図1 子ども調査

を単純集計した結果には違いが見られるのか。それを明らかにするために、「完全一致ペア」と「不一致ペア」で違いがみられた項目も含め、親子合わせて133全ての項目で「完全一致ペア」のみのデータと、「完全一致ペア」「不一致ペア」両者を含めた全データの単純集計を比較した。その結果、頻度に大きな違いはなく、全ての項目で有意差はみられなかった（表14）。

たとえばクロス集計をした際、 χ^2 値が大きく比較的差が見られた子調査票の地域活動に関する設問でも図1のとおりであり、大きな回答差はみられない結果となった。このことから、親子ペア・データを分析する際、信頼性がある完全一致ペアのデータのみを使用することが正確な分析結果を得るための一つの方法として考えられるが、信頼性に疑問が残る不一致ペアのデータも含めた全データを用いて分析を行なっても問題がないことが今回のデータからは示唆された。

4. 結論

親子調査を実施し、元来親子の回答が一致しなければならぬ属性などの項目に関して確認したところ、1～2割程度の回答が一致しないことが明らかになった。一致するはずの4項目中全ての項目で一致するペアは6割弱で、半数近くが一致しなかった。親子データを収集する際には、そのペアをどのように一致させるかだけでなく、どの子どもを対象としている調査なのかについて、親が明確にわかるような調査票作りや、子ども同士が調査票を交換しないようにする配慮をしていかななくてはならないことが示唆された。

完全に一致するペアのデータと、一致しないペアのデータを比較すると1割程度の項目で回答傾向に違いがみられた。しかし、完全に一致する信頼性の高いペアのデータと、信頼性に疑問が持たれる回答不一致のペアのデータを含めた全データでの分析を比較してみると、その回答傾向には違いがみられなかった。これらのことから、親と子の回答が一致しなくとも、全く信頼性がないデータとは言えないことが示唆された。すなわち、親子の回答が一致する信頼できるデータと、疑問の持たれるデータを一緒にして分析してもさほど問題はなく、有効なデータとして活用することが可能であることが本データからは明らかになった。

ただし、信頼性があると考えられるデータのみと、全データの回答傾向を比較した場合に有意差がみられなかったといっても、全データは信頼性のあるデータを含めたため、信頼性のないデータの結果が薄められた形で有意差がなくなっただけであり、分析結果に問題をはらむ可能性もある。今後はそれらの検証も進めていかななくてはならないだろう。

文献

- 第一生命経済研究所, 2007, 「『子どもの生活に関するアンケート調査』の結果概要」『ライフデザインレポート』9-10月, 36-51.
- 藤崎浩幸, 2005, 「認定農業者親子間の就農誘導と就農意欲」『弘前大学農学生命科学部学術報告』8, 52-57.
- 藤田武志, 2008, 「親と子どもの意識と行動—親子ペア調査から見た階層差—」『上越教育大学研究紀要』27, 67-72.
- 神林博史・片瀬一男, 2008, 「親子調査における親欠票の原因」『社会と調査』2, 20-27.
- 苅谷剛彦ほか, 2007, 『教育改革を評価する—犬山市教育委員会の挑戦—』岩波ブックレット.
- 明治安田生活福祉研究所, 2004, 『高校生意識に関するアンケート調査』
- 耳塚寛明, 2007, 「学力と家庭背景」『青少年期から成人期への移行についての追跡調査研究』JELS 第10集, お茶の水女子大学, 1-15.
- 中村真他, 2007, 「親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ—親子双方の視点から—」『川村学園女子大学研究紀要』18(1), 123-140.
- 塩釜市健康福祉部健康課, 2006, 『親子の食生活実態調査報告書』
- 高橋富士雄, 2007, 「岩手県内の主な地域の中中学生とその母親の身体状況と食生活の現状(2)」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』9, 13-23.
- 海野道郎・片瀬一男編, 2008, 『<失われた時代>の高校生意識』有斐閣.
- 全国高等学校PTA連合会・(株)リクルート「キャリアガイダンス」, 2003, 『高校生と保護者の進路に関する意識調査』

附記

本研究は、故上見幸司常磐大学名誉教授を中心に行われた共同研究による調査結果のデータを用いている。なお、本研究の責任は全て筆者にある。本研究の一部は、2009年10月日本社会学会大会（於：立教大学）で発表されたものである。

篠原清夫 SHINOHARA, Sugao 専修大学人間科学部兼任講師